山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第42号（2016.9）

# 『夏の庭－The Friends』を通してみた少年の対象喪失過程

恒吉　徹三

On Process of object loss of the Children through Kazumi Yumoto's "The Friends"

TSUNEYOSHI Tetsuzo
（Received August 3, 2016）

キーワード：対象喪失、映画・小説、湯本香樹実

## はじめに

本稿では、湯本香樹実（1992）の『夏の庭―The Friends―』を素材として、物語に登場する少年たちの対象喪失過程について検討する。特に、死を前提として対象と関わる少年たちの心的変化と対象喪失過程についてみていく。この作品には、死んでゆく（であろう）「おじいさん」を観察する３人の少年が登場し、この少年たちと「おじいさん」とのかかわりが物語の中心である。さらに、この３人の少年たちの家族背景の困難さについて山岸（2007）が指摘しており、「両親の仲がしっくりいっておらず、母親はアルコール」に浸っている少年、両親が離婚して父親がいないことに加えて、母親からの関心がうすい少年、両親がいても父親と同じ職業に就くなと母親に言われている少年という点に言及している。つまり、養育者の心理的不在や抱える環境の不十分さが部分的に関わっていると考えられる状況での対象喪失の物語としてとらえる必要がある。さらに、「おじいさん」自身も戦時中に国外に出征し帰国後は妻のもとに帰らなかったのであり、妻やふるさとを喪失しているともいえ、さまざまな対象喪失の話題が盛り込まれている。つまり、この物語には、何かがないこと（すでに失われたこと）や、何かを失う過程が描かれていると理解することができる。

以上述べたような点から、この物語は少年たちが死をはじめとする対象喪失に、どのようにかかわっていくかを検討するのにふさわしい素材だと考えられる。もちろん、小説も映画もいずれも創作物であり少年の喪失体験そのものではない。しかし、映画をはじめ、物語、小説、神話、おとぎ話は心的世界のありようを理解する素材として幅広く活用されている。精神分析学の観点から北山（2009）は、「文化遺産のなかから既成の物語を取り上げて活用することの、私たち臨床家にとっての利点は、個人のプライヴァシーに関する報告を詳細におこなわなくとも、人生の問題の本質を議論できることである」と指摘している。さらに、筆者は、誰でもが手軽に入手できる文化的媒体を用いることで、研究者のみならず多数の人と素材そのものを容易に共有できるので、研究内容の妥当性について根拠を確認したうえで批判できる利点があると考えている。

また、エリクソンの発達論の観点からこの作品について、生産性の点で相反する位置にいる「老人」と「少年」とが出会うことで、お互いの生活に影響をおよぼしあい、世代性のテーマもあいまって、双方に肯定的な変化をもたらしていると山岸（2007）は指摘している。

他方、文学的な観点からもこの作品について検討されている。主人公の１人（山下）が母親を、物語の初期には「お母さん」、終わりには「おふくろ」と呼んでいるという変化から、少年の成長が描かれているという点に加え、原作を英語に翻訳するさいに、主人公の１人（木山）が死を含め、わからない未来について不安を感じていることを英訳者が補足していることも指摘している（安達，2003）。さらに、「死」がこの作品の主題であることが明確に英訳されているかを、原作との比較を通して検討した大野（2012）は、おじいさんと交流するなかで少年たちが成長し、おじいさんの死に直面して死に対する見方を変化させている点を指摘している。さらに、英訳では、死と死を表象するもの（「お化け」類、花、花と火）との結びつきが原作よりも一部で弱い点のあることも指摘している。しかし、少年たちの死のとらえかたの変遷について詳

しく検討しているわけではない。

一方で、主人公の成長物語という点について江藤（1998）は、「視点人物を『子ども』に置いた『大人』と『子ども』の物語である限り、そこになんらかの『成長物語』は存在し、その『成長物語』の構造自体は不動のものとなる」ことから、児童文学としての『夏の庭』を問題とすることは、成長物語の構造の在り方を指摘することになると述べている。さらに、成長と死の直接対決を避け、子どもと死を対面させなかったが、「おじいさん」は最後に自らの死によって逆説的に生を教えることになるとも指摘している。このように死と生を対立軸としてとらえる観点もあるなか、文学的な観点から平松（2012）は湯本の『岸辺の旅』について、「生と死がとても親しい。死は忌むものでも怖ろしいものでもなく、まして対極にあるものでもなく、むしろ混じり合うことを希求するふうに扱われ、描かれる」と解説している。つまり、湯本作品において死は、生の中に必然的に組み込まれているものとしてとらえられていると考えられる。筆者も、平松の見解と同様に、湯本作品には死が生のなかに当たり前のように存在しているように描かれていると考えている。

また、米谷（2010）は、『夏の庭―The Friends―』についての児童生徒の全国読書感想文コンクールの入選感想文（2009年の第5回までの小学校上学年：20点、中学校：55点、高校：22点が分析対象。これらのうち44点が女性のもの）を、①「三人組の行動に対して、なぜおじいさんが応じるようになったのか」、②「三人組とおじいさんの交流がもたらしたものは何なのか」、③「三人は、おじいさんの死をどのようにとらえたのか」という３つの観点から分析している。これは感想文を評価するという観点が含まれているものの、小学校～高校の児童生徒に共通した考えとして、「おじいさんの死が三人の心の中に生きるという考えであり、少年達の生き方に影響を与えたということである」と記述的なレベルで要約しているが、「おじいさん」の死の少年たちへの影響過程について検討しているわけではない。

以上述べてきたように、『夏の庭―The Friends―』についての先行研究は、死に子どもを向き合わせなかった（江藤，1998）と指摘しているものが一部あるものの、心理学的および文学的観点の双方から、生と死のテーマにかかわるものとして検討されている。

そこで本研究では、死と少年たちとの関わりについて以下の３つの点から質的に検討することを目的とする。ただ、この３つの問いは原作を読む前に準備されたものではない。問いの生成過程を述べると、初期には①少年たちは、死に対してどのように感じているのか、であったものが原作を読み込むうちに②少年たちが死に対して感じていることは、おじいさんとの関わりの中で、どのように変化していくのか、と明確化された。その後、さらに③少年たちの死に対する感じ方には、おじいさんと関わる以前からの背景要因があったのか、また、④おじいさんの死という対象喪失は、結果として少年たちに何をもたらしたのか、という問いに至ったものである。つまり、問いは以下の３つである。

１．少年たちが死に対して感じていることは、おじいさんとの関わりの中で、どのように変化していくのか。

２．少年たちの死に対する感じ方には、おじいさんと関わる以前からの背景要因があったのか。

３．おじいさんの死という対象喪失は、結果として少年たちに何をもたらしたのか。

なお、検討にさいして映画化された資料（監督：相米慎二）も参考に用いる。ただし映画は脚色されて一部が原作と異なる展開になっている（たとえば、おじいさんと少年たちの担任の女性教師との関係など）。

## １．あらすじ

この物語は、小学校６年生の「ぼく」こと木山の一人称の視点から語られていく。以下に主な登場人物を示し、そのあとに、物語のあらすじをおじいさんとの関わりによって３つの時期に分けて示す。

### １－１　主な登場人物

木山：小学校６年生。両親と三人暮らし。母親は専業主婦で、お酒をよく飲んでいる。

河辺：小学校６年生。両親は離婚しており、パートをしている母親と二人暮らし。

山下：小学校６年生。魚屋を営む父親と母親との三人暮らし。

おじいさん：一人暮らし。

古香弥生（ここう　やよい）：おじいさんの妻。老人ホームに入居している。

種屋の女性：おじいさんの庭に植える種を、少年たちが買に行った店の店主。

### １－２　あらすじ

#### １－２－１　初期（１章～３章）：遠巻きで関わりがない観察：未知で圧倒的なものとしての死

主人公の木山は、死別体験がない。一方、クラスメートの山下は、祖母の葬儀に列席し、人は死ぬと焼かれて骨になり、白くてぼろぼろになることを知る。そして、葬式の晩に、大きなトラのぬいぐるみとプロレスをしていたのに、いつの間にか祖母の死体に変わる夢をみる。この話を聞いた木山はぞっとしながらも、「死んだら、どうなるんだろう」と考える。そして、近所に住むもうじき死にそうな「おじいさん」を、死んでしまったらどうなるのかと３人は観察を始める。さらに河辺が見た夢では、山下のおばあさんが河辺の上に倒れてきて、重くて身動きが取れず、目が覚めると回りは火で狭いトンネルの中でまだ生きているのに燃やされ、助けてと叫ぶと本当に目覚める。さらに現実生活でも河辺は、高いところに上ると落ちて死ぬのではと考え、死んだら死について話し合えないと思ったという。［火葬の話に強い刺激を受けて夢を見、跨線橋にも上がり死へ引き込まれるほどのインパクトがあったことが理解できる］さらに、木山も、小さいころに見ていたお化けが追いかけてきて、焼き殺されそうになる夢を再びみるようになる。お化けが恐いのは、自分のことをかまうこともなく、理解する気もなく、言葉も通じないうえに、自分もお化けのことを理解できないから、自分が生きる世界とは別の死の世界の住人だからだと理由づける。

おじいさんを観察しながらも、玄関の扉が開きそうになると３人は逃げ出す。おじいさんを、毎日付け回し、おじいさんの腕にしみがあるような細部は詳しく思い出せても、おじいさんの顔は思い出せない。ある日、山下は「もうすぐ死ぬなら」と自宅の鮮魚店から刺身をくすねてきておじいさんの玄関前において隠れ、おじいさんが受け取る。（［　］は筆者の理解）

#### １－２－２　中期（４章～11章）：直接的な関わりの始まり

学校が夏休みになって、おじいさんの家の前を通りかかり、おいしかった食べ物が腐って気持ちの悪い臭いがするごみ袋を木山はゴミ出しし、『いい変化』と『悪い変化』があると考える。［ここにも「ものが腐る」ことは死ともつながることだと考えられ、重ね合わされている］このゴミ捨てのさなかにおじいさんに見つかって怒鳴られ、３人とおじいさんとが初めて話をする。その後、３人はおじいさんの家の庭に生い茂った草を刈り、洗濯物を干す手伝いをし、家でも洗濯物を干している河辺がうまく干すので、おじいさんにほめられる。また、コスモスの種を買って庭に蒔く。そして木山が小学校２年生のころには、一生の間にする呼吸数を聞かされて、呼吸を数えるようになり、息ができなくて死ぬ不安に襲われていたことを思い出す。

最初は３人がおじいさんをみていたのに、次第におじいさんに３人が見られるようになる。おじいさんは朝早起きし、自分で料理をするようになる。そんな時期に山下が学校のプールでおぼれて死にかける。これをきっかけに、木山は、死んでもいいくらいの何かができるのか、なんのために生きるのかと考えるようになる。台風が上陸した夜にコスモスが心配になった３人は、おじいさんの家に出かける。おじいさんは、戦地で女性が身ごもっているとは知らずに銃殺したことを３人に告白する。この体験からおじいさんは奥さんも自分の幸せもすべて捨てたのだろうと少年たちは考える。奥さん（古香弥生）が老人ホームにいることを少年たちは突き止めて会いにいく。奥さんは、自分の夫は死んでいる、たとえ生きていても帰ってこないからといって恨まない、と木山に答える。コスモスの種を買った店のおばあさんが、おじいさんの奥さんと似ていると思った木山は、おじいさんの奥さんのふりをしてほしいと頼む。おじいさんにうそだとばれたが、２人とも同郷だとわかり、話が弾む様子を見た木山は、歳をとることは楽しいことかもしれないと思い始める。

また、木山の母親は、自宅でワインを飲んで食事をしないので、おじいさんに習ったように梨をむいて母親に食べさせる。

ある日おじいさんは、３人を川原に連れ出し花火を上げて見せる。その場に居合わせたカップルがおじいさんと少年たちにごちそうしてくれる。カップルと楽しそうに話すおじいさんの姿をみて頼もしいと感じる。

#### １－２－３　後期（12章～15章）：おじいさんの死との対面

少年たちはサッカー部恒例の夏合宿で、コーチの実家が民宿をしている島に行く。木山は、移動途中に墓があることに初めて気づいたり、民宿で山下が暗いところにお化けがいそうだと恐がったりし、河辺が木山を起こして３人でトイレに行く。木山は、わからないことが恐いもとだと言う。

木山は、コーチのおばあさんを、去年までは『お年寄り』としかみていなかったが、おじいさんとは顔立ちが違うことに初めて気づく。

合宿から帰った３人がおじいさんの家に行くと、おじいさんが布団の上に横になっているのをみて、「眠っているんじゃない」と感じ取る。河辺はしゃがみこんでうめき声をあげ、木山は、「おじいさんの抜け殻」であり「この体で」ぼくと話すことはないと感じる。「ぼくが初めて見る死んだ人」であり「おじいさんの体は、長い間着古した服のように、やさしく、親しげに、そこに横たわって」いておそろしいとは感じない。合宿中も「空想の中でおじいさんとその日のできごと」を「話し合っていた」ので、「何か言ってくれたら」と思ったりしたが「何も聞こえな」いので「その時、ぼくは初めて泣いた」と木山。その夜木山は眠れなかったが、「ここにいるよ」とつぶやくと、「胸の中にぽっかり開いた穴のようなものが、少しだけ、柔らかな何かでふさがれるような気が」する。翌日の葬儀で、おじいさんが小さくこわばっていたので見たくない、おじいさんじゃない、と木山は感じる。３人とも泣きだし、「すべてがぼんやりとした膜におおわれている」感じがして、「泣いているぼくとは別のもうひとりのぼくが、眠りこんでいるような感じ」だという。火葬場で河辺は、自分が死んだ人を見たいと思ったから悪いと嘆く。木山は、煙突から昇る煙をみながら、目をそらさずに見届けなければならないと思う。おじいさんは、手の届かないところへ行って生き返らないと骨を見て実感しても、「不思議なほど静かで、素直な気持ちに充たされ」ていると感じる。おじいさんに受験や将来の悩みを聞いてもらったり、一緒に酒を飲んだりできないのは「さびしい」「心細い」と感じる一方で、それは「僕の問題」だと自覚し、「おじいさんは、充分、立派に生きた」と意味づける。

おじいさんの死からひと月ほどたって、取り壊される予定のおじいさんの家のコスモスが咲く庭に少年たちは集まる。山下は、この家のことを忘れてしまいそうだと心配し、木山も、思い出そうとするほどいろんなことが抜け落ちていくという。その後、木山の母親が肝臓の病気で入院し、父親は毎日のように母親を見舞い、料理を木山と一緒に作るようになる。父親から将来何になりたいかと問われ、忘れたくないことを書き留めて他に人にも分けるために小説家になりたい、と木山は受験勉強に打ち込む。

卒業式になり、木山は私立中学に合格し、山下は落ちたので、「おふくろ」も魚屋になることを許してくれるかもと言う。河辺は母親の再婚話に、おじいさんだったらどう言うだろうと考える。同じようにおじいさんと心の中で対話している木山は、おじいさんが思い出の中に生きているのとは違って手ごたえがあると感じている。山下は、夜中に１人でトイレに行けるし、あの世に知り合いがいる、という。河辺もいつもの貧乏ゆすりもなく、晴れ晴れした顔になる。

## ２．考察

### ２－１　少年たちとおじいさんの関わりの変化と死のとらえかたの変化

#### ２－１－１　物語の初期：遠巻きの観察（遠いものとしての死）

少年たちは、おじいさんを探偵のようにつけまわすだけの直接的な関わりのない観察者であり、少年たちとって死は、遠く離れた別世界のこととしてとらえられている。この死との距離感から、少年の内の一人が祖母の葬儀に出た話が刺激となり、夢にお化けが現れ、跨線橋から落ちないではいられない気持ちり、死はとらえようがないだけに圧倒するほどの恐れを抱かせるものとなっている。お化けは、言葉も通じない、わかろうともしない、わかることもできない、死の世界の住人として感じており、通じない存在であることが強調され少年たちの世界と死とは分割されている。そのため、怖いもの見たさで駆り立てられるようにおじいさんの観察は始まり、自らの意思では止められないほどのものとなっていると考えられる。

つまり、少年たちがおじいさんと距離を保って観察しているように、少年たちと死とは言葉も通じない別世界として分割されている。人が死んでもどんな気持ちになるかもわからないし、夢に出てくる死体も単なるモノであり、死そのものもわかりようもなく、圧倒されるほど恐ろしいものとしてとらえられている。そのため自分自身についてもいつか死ぬとしても、死んだらどうなるのか、と漠然とした不安が喚起されることになる。

一方、少年たちにとっての環境である家族関係についてみると、木山の母親は料理を作っても家族と一緒に食べることはなく、アルコールを飲みながら子どもの食事する姿をただみているなど、関わりが薄いことが指摘されている。つまり、母親は物理的には近くにいても心理的には不在であり、少年にとってとらえがたい存在ともいえる。死も物理的に近くにいる母親も遠い存在として並行に位置づけられていると理解できる。

### ２－１－２　少年たちがみた夢を通して（内的要因の理解）

夢が語られているのは、おじいさんとの直接的な関わりがない初期だけであり、山下のおばあさんの葬式の話を聞いた反応として生成されたものだと考えられる。以下に、記述されている夢と夢への少年たちの反応とこの夢についての筆者の理解を（　）で示す。

**夢１（１章、山下）**：山下のおばあさんの葬式の夜、トラのぬいぐるみとプロレスしていて気づいたら、おばあさんの死体に替わっている。

**夢１への木山の反応**：ぞっとさせられ、死んだらどうなるのか、それで終わりなのかと考える。死んだ人が物体なら、心や魂とは違いお化けは重さを計ることができる物で、救いがたい感じを受ける。（ぬいぐるみと同じで反応がない「モノ」「物体」としての死体であり、死もモノとしてのものでしかない）。

**夢２（１章、河辺）**：山下のおばあさんが倒れてきて重くて身動きできない。目覚めると回りは火で、狭いトンネルみたいな中で燃やされ、まだ生きている、助けて、と叫ぶと目醒める。（火葬場面について話を聞いた恐怖にたいする直接的な反応だと理解できる）

**夢３（２章、木山）**：　小さいころ見ていた凸凹コンビに追いかけられる夢を再び見る。誰もいない薄暗い廊下で待ち伏せされたり、広い道路をケラケラ笑いながら追いかけられたり。寝小便するほどうなされる夢。山下のおばあさんが死んだ話を聞いてからは、暗闇の中で松明を持って焼き殺そうとして、ケラケラ笑いながら目をぎょろつかせて追いかけて来る。

**夢３についての木山の理解**：お化けが怖い理由が今では少し分かるのだといい、お化けは自分のことを全然かまわないし、理解する気もないし、自分もお化け理解できないからだという。死にたくないから殺さないでくれと頼んでも、ケラケラ笑って言葉が通じない別の世界・死の世界の住人。（少年の不安を反映した夢だと理解できるが、この夢を見ていた小さい頃の状況がさだかではないため、どのような不安が生じたときに見ている夢であるのかを明確にはとらえることができない。しかし、少年自身の理解からすると、死への不安を感じたとき、または、通じ合えない対象や物事に直面した時に見ている夢だととらえることはできる）

このように見た夢を整理すると、山下のおばあさんの死や葬儀の話題に対して、内的に深いレベルでも圧倒されるほどの強い刺激を受けていることが理解できる。死者をモノ・物体的だととらえたり、子どもの頃に見ていたお化けに追われる夢をみるようになったりしている。また、お化けが恐い理由が、お化けも自分も、お互いに理解できないし、言葉も通じない別世界・死の世界の住人だととらえている。さらに、火葬場の話に刺激されて、狭く暗い空間やその空間で生きたまま焼かれるという不安を喚起された夢が語られている。

つまり、死ぬことがどんなことなのかわからないということが、少年にとって言葉の通じないお化けという対象像として表現されている夢だと言える。さらに、おじいさんとの直接の関わりの無い時期の夢であることから、少年たちは死について手ごたえをもってとらえることができずただ圧倒されて退行し、空想世界へと逃避していると理解することができる。

### ２－１－３　物語の中期：おじいさんと少年たちの積極的交流（生と死の近さ）

おじいさんと少年たちの直接的なかかわりが始まり、おじいさんの出征中のできごとや、少年たちとの関わりの中ではみることのなかった他の大人と関わるなかでおじいさんの一面を知り、頼もしさを感じる。死の話題は唯一、戦時中に妊娠していることを知らずに女性を射殺したという告白だけである。この話を聞いた３人は、おじいさんが奥さんの元に返らなかった理由として理解する。つまり知性化することでおじいさんが人を殺した話を聞いた衝撃を収めていると考えられる。そのうえ、おじいさんが死ぬかどうかよりも、生きているおじいさんがどんな人なのかに関心が注がれている。おじいさんの過去の職業を知ったり、他の高齢者と話す姿をみて、歳をとることが楽しいことかもしれないと思ったり、若者と楽しそうに話すのを初めて見ると、頼もしくも思ったり、自分たちとは違う関係の中でのおじいさんの姿を知る。

さらに、悪臭を放つゴミについて、『いい変化』と『悪い変化』のあることを感じ取ったり、コスモスを庭に植えるというエピソードもあったり（コスモスはキク科で死と関わることを大野（2012）は指摘している）。前期には「生ける屍」だったおじいさんが天ぷらをあげるなど少年たちとかかわることで元気になっ

ていく（山岸，2007も指摘）といったように、一見すると死から遠ざかっていくような話題もある。一方で、木山は、小２の頃、呼吸の数を数えているうちに息のしかたがわからなくなって死にそうになり母親を呼んだことを想起する。そして、母親とは違うかたちでおじいさんにみられていることに気づく。つまり、現在の死への関心や見守られている体験が、連想的に過去の記憶を早期させている。また、溺れて死にかかった仲間の体験から、逆に生きることを考え始めたりもする。

中期は、生きることと死ぬこととの間を少年たちの関心は行き来し、生と死が同時に語られていく。さらに、少年と母親との関係が前期よりも具体的に語られ、アルコールを飲む母親は物理的には存在しているのに心理的に不在な感じがして落ち着かなくなったり、おじいさんに習ったように梨をむいて食べさせるとその日は酒を飲まなかったり、とおじいさんとの関係の変化が、親子関係の変化と並行している。

### ２－１－４　物語の終盤：死別とおじいさん像の内在化

おじいさんは死に、家も取り壊される（映画では、コスモスの満開から、家が少しずつ朽ち果てていく様子が描かれている）。おじいさんやおじいさんを象徴するものが外的世界から喪失するところに少年たちは立ち会う。その結果、初期には生と死の世界が分割され、どのようなものかわからないために怖かった死が、恐れるものではなくなる。しかし、死に立ち会ったことで、おじいさんではないと否認したり、小さくこわばったおじいさんをみたくないと回避しようとしたり、「すべてがぼんやりとした膜におおわれている」「泣いているぼくとは別のもうひとりのぼくが、眠りこんでいるような感じ」というように一時的に現実感覚がうすれている。つまり、おじいさんの死体をみた少年の衝撃がいかに大きいものであったかが示されている。さらに半年以上が過ぎたところでは、対象喪失によるさびしさを感じる一方で、思い出の中におじいさんが生きているというのとは異なる手ごたえも感じている。つまり、心の中の対象としておじいさんが取入れられている。さびしくても心細くても悩みは自分自身の問題だととらえ、おじいさんからの自律的感覚が生じる一方で、おじいさんは立派に生きたと理想化される。この理想化には、一面としてまだおじいさんの死を受け入れがたい気持ちが反映されているともいえる。そのため、おじいさんの死後しばらくすると、木山自身もさびしさをまぎらわすかのように受験勉強に没頭している。

一方、家族関係の変化をみると、木山の母親の入院をきっかけに、存在の薄かった父親が毎日のように母親を見舞い、息子に料理を作る。さらには、息子の将来の夢が何かを聞くなど、父親が家族に関心を向けるなど家族相互の関係がすこしずつ活発になる。

また、少年たち自身の変化とその認識についても物語中に表現されており、一人の少年の母親の呼び方が、「かあちゃん」から「おふくろ」に変わったことで、他の二人は感心を抱く。この点は、安達（2003）や江藤（1998）が子どもの成長物語だと指摘していることを、本稿では、対象喪失との関連で検討したものだといえる。

## ２－２　死に対するとらえかたの背景要因としての家族関係

この物語には、いくつかの家族のありようが描かれている。少年たちの発達を支える環境としての家庭は、山岸（2007）も指摘しているように、十分に機能していない。この支えのなさが死への不安を強めていると同時に関心を強めていると理解することができる。少年たちの家庭的な不安定感と、おじいさんの寄る辺なさに通じるものがあって結びついた関係といえる。しかし、おじいさんの葬儀前後には、母親たちが少年を迎えにきたり、父親が料理を息子（木山）と作ったり入院した妻を見舞ったりするなど、親子の関わりが増えている。たとえば、息子のすぐ側にいるのにアルコールを飲んで心理的に不在だった母親が、子どものむいた梨を食べた後はアルコールを飲まないなどちょっとした変化が生じている。また、物語の最後になると母親に対する呼び方が、お母さんからおふくろに変化し、家業を継ぐことを母親が許すだろう、と考えられるようになったり（山下）、母親が再婚することを承認したり（河辺）、と少年と少年を取り巻く環境である家族にちょっとした変化が生じている。つまり、少年たちを「抱える環境」（Winnicott, 1965/1977）としての機能が少しずつ回復していることが、少年たちにより安心感をもって死について考えさせ、将来や生に目を向けやすくしていると考えられる。

この家族関係の変化には、おじいさんの死の結果というよりも、おじいさんと少年たちの関係が、家族との関係を変化させたという一面があると考えられる。

### ２－３　対象喪失が少年たちにもたらしたもの

少年たちと関わり深めていったおじいさんとの死別は、少年たちに何をもたらしたかについて検討する。先に述べたこととも重なるが、家族関係の変化がおじいさんとの関わりの中で生じている。これは、おじいさんという外的な対象はいなくなっても、心の中の対話できる対象として内在化されて位置づいた結果ともいえる。おじいさんの死の直前の段階では、少年のうち１人の体験として、合宿中の出来事を空想の中でおじいさんに話しているがおじいさんは何も言ってくれない、という中間的な段階がまずあり、おじいさんが死んで数か月たったころの別の少年の体験として、母親から再婚することを告げられて、おじいさんだったらどう言うだろう、と少年がおじいさんという対象を想定して心の中で対話しどのようにすべきか考えを巡らせるようになっている。

さらに、死そのもののとらえ方がより現実的で個別性を備えたものに変化している。初期には、死はモノ的な印象や、悪夢をみるほどの圧倒的な脅威や、別世界の出来事として感じ取られていた。それが、おじいさんと関わりがすすむうちに生と死が近いものとなり、最後には、初めてみた死んだ人に対して、まるで着古した服のようでおそろしさを感じないほどになっている。感情面でも、おじいさんの不在を寂しく思うという対象喪失にともなう自然な動きが示されている。言い換えるなら、一般的で抽象的な死がより個別性をもったものとして実感したことで脅威が軽減されたと理解できる。この過程は、『お年寄り』という匿名性の高い存在でしかなかった存在が、おじいさんと違う顔立ちをした特定の個人として存在していることにも気づくプロセスも並行している。

一方で、おじいさんは充分立派に生きたし、あの世に知り合いがいると少年たちはとらえているため、この物語では少年たちが死と向き合っていない、という指摘もある（江藤，1998）。この指摘を臨床心理学的に検討するために、おじいさんの死にまつわる少年たちの喪の作業は進んでいたのかと言い換えることにする。時間経過の点から確認すると、おじいさんの死が８月末前後であり、火葬後には「充分、立派に生きた」とおじいさんのことをとらえている。また、家の取り壊しが死後２か月（10月初め）で、卒業式は死後７か月であり、ここに至って「あの世に知り合いがいる」と言っている。つまり、死後の法事のあわただしさは一段落していると考えられる時期であることからすると、悲しみを実感するだけの気持ちのゆとりが生じやすい時期だといえる。すると、少年たちが「あの世に友だちがいる」と言っているのは死後７か月後ころであり、多少の時間が経過し喪の作業のさなかでの発言だと理解できる。その点からすると、江藤（1998）の指摘するように、少年たちは死と向き合っていない（否認）という指摘を全面的には肯定できない。ただし、少年２人には中学受験というこなすべき外的課題があり、この課題に没頭することでおじいさんの死について考えないようにするという「健康への逃避」という防衛機制を用いているということもできる。つまり、受験という外的にこなすべき大きな課題があるという現実的な状況を考えるなら、おじいさんの死について深く考えないようにすることは、適応的な手段を用いているということができる。しかし、死についてまったく向き合っていないともいえない。そこで、受験が終わった後や次に対象喪失と遭遇したときに、におじいさんの死について考えを巡らせる作業が必要となる可能性もある。ところで、力動的なアプローチからの発想からすると、向き合っていない一面もあれば向き合っている一面もある、という両面的なものごとのとらえかたをするため、向き合っている面も向き合っていない面もどちらもがあるととらえるほうが内的世界の現象にはそっているといえる。

また、おじいさんの死への反応を決めるものとして、おじいさんと少年たちとの関係要因（アタッチメント）をあげることができる。短期間のつき合いであったが、胸に秘めていた戦時中の銃殺体験をおじいさんが少年たちに告白するなど、関わりは深い一面もあったと考えられる。このような関わりの深さと死別への反応についてParks(1996)は、「私は、関わりを、人の役割、計画、問題解決のレパートリーの遂行が、その妥当性と実際性の上で他者の存在に依存する程度だと考える」と指摘している。死別がもたらす反応は対象が果たしていた役割の程度によるという指摘であり、たとえばおじいさんは梨の皮のむき方のような日常生活で必要なことを少年たちに教えるという現実の人間関係的側面と、少年たちがこころのなかで、「もしおじいさんだったら」と対話する内在化された対象としての存在との両面が示されている。ある意味では、合理的な態度を示す大人、つまり自我機能を代理する人物としての役割をおじいさんは担っていると理解できる。この点では、江藤（1998）が、成長と死の直接対決は避けたが、おじいさん自身が死ぬことによって逆説的に生について教えることになったと指摘しており、どのように生きるかについての内的モデルを形成する過程ということもできる。

ところで、子どもの発達にとって対象喪失が果たす役割について森（1990）は、臨床経験をもとに『子鹿物語』を素材にして検討している。この物語の少年自身が対象喪失へ至る出来事に積極的に関わっている点をふまえて、「過酷な現実を受け入れていくという人生課題、言い換えれば、少年的なものの見方や考え方が、大人のそれへと発達していく」という課題のひとつが示されていることを指摘している。つまり、個人の意思では動かすことのできない現実のあることを思い知る機会として対象喪失をとらえなおすことができる。すると、おじいさんの死という現実に加え、山下は中学受験での不合格、河辺は母親の再婚、木山は私立への進学にともなう友だちとの別れという、それぞれの選択によって生じた現実に内在化されたおじいさんと対話することで直面し、こなすことができたといえる。

## おわりに

『夏の庭―The Friends』（湯本，1992）を素材として、少年たちの対象喪失過程を検討すると、初期には誰かの死という抽象的な死は、想像も及ばない出来事であり圧倒されるほどのものとしてとらえられていることが、夢にも表現されていた。しかし、おじいさんという実在の対象とかかわるうちに、生と切り離された死ではなくより近いものとしてとらえられていった。そして、少年たちの関心は、おじいさんの職業や家族のことなども含めた全体的な対象としての関係へと変化した。さいごには、おじいさんが実際に死ぬというより具体的な出来事として対象喪失を経験し、次第に目の前にいなくても対話のできる対象として内的に位置づけられていくことになる。その結果、少年たちが現実的な判断を求められる状況になると、おじいさんだったらどう言うだろうか、という視点で考えられるように変化した。つまり、親とは異なる合理性のある対象としておじいさんは内在化されたということができる。喪失した対象が内在化されることは臨床的な観点からは一般的なこととして指摘されているが、ここでは、より合理性ある対話の対象として内在化されたことが特徴だといえる。これは、成人ではなく小学６年生という思春期前後の発達段階であったことで、両親からの心理的自立へと進む段階にあり、親とは異なる対象を求めている時期であることとも関わっているといえる。加えて、おじいさんの死という現実について、またその死へと至るまでの過程のできごとについても、少年たちの仲間関係の中で、内的世界や不安を語り合えたことがおじいさんが内在化されたひとつの要因であったといえる。つまり、おじいさんとの死という少年たちの対象喪失経験は、少年たちに合理的な思考を示してくれる対象としておじいさんを内在化させた、ととらえることができる。

ただ、少年たちの変化のすべてがおじいさんとの関係だけで生じたとは言えないであろう。家族やおじいさんを取り巻く大人たちとも少年たちは関わっており、複数の大人と関わることで、おじいさんや、家族の在り方を相対化していく機会をもったことも変化の一因であると考えられる。

## 引用文献


安達励人：翻訳としての『夏の庭』，倉敷市立短期大学研究紀要，39，21－25，2003.

江藤茂博：湯本香樹実『夏の庭　The Friends』論―根拠なく反復する家族共同体，十文字学園高齢社会生活研究所紀要，Vol.1，35 - 45，1998.

平松洋子：解説，湯本香樹実『岸辺の旅』，文藝春秋，226－232，2012.

北山修：愛するものを「害する」こと―父神イザナキの罪悪感―，北山修・橋本雅之：日本人の＜原罪＞講談社現代新書，2009.

森省二：子どもの対象喪失―その悲しみの世界―，創元社，1990.

大野温子：湯本香樹実『夏の庭―The Friends―』の英語訳を考える―「死」をめぐって―，Tinker Bell，57，1-15，2012.

Parks，C.M.：*BEREAVEMENT: Studies of Greif in Adult Life Third Edition*，Taylor & Francis，1996：桑原治雄・三野善央：改訂　死別―遺された人たちを支えるために，メディカ出版，2002.

山岸明子：老人と少年の交流がもたらすもの―2つの小説をめぐる発達心理学的考察，順天堂大学医療看護学部医療看護研究3，102－108，2007.

米谷茂則：児童生徒は『夏の庭―The Friends―』の読書で何をどのように考えたのか―全国読書感想文コンクールの入選感想文分析から，学芸国語教育研究，28，2-19，2010.

湯本香樹実：夏の庭―The Friends―，新潮文庫，1992.
Winnicott, D. W.：*The Maturational Processes and facilitating Environment*. London: Hogarth Press Ltd.，1965：牛島定信（訳）：情緒発達の精神分析理論，岩崎学術出版社，1977.

## 映像資料

読売テレビ放送株式会社：『夏の庭―The Friends―』（DVD：HDリマスター版），発売元：中央映画貿易／オデッサ・エンタテインメント，2004.